

読書への誘い

＜第Ⅲ期 第 23 号＞通巻 1 1 8 号

1 2 月に入りました。日中の日差しは暖かだとはいえ、やはり襟元を通り抜ける風は冷たいですね。マフラーや手袋といった「冬の小物」が活躍する季節となりました。夕日が見られるのが 4 時過ぎ。遠くの空がきれいです。

遠景

木山 捷平

草原の上に腰を下ろして
 若い少女が
 髪の毛を風になびかせながら
 むしんに絵を描いていた。
 私はそっと近づいて
 のぞいて見たが
 やたらに青いものをぬりつけているばかりで
 何をかいているのか皆目わからなかった。
 そこで私はたずねて見た。
 — どこを描いているの？
 少女はにっこりと微笑して答えてくれた。
 — ずっと向こうの山と空よ。
 だがやっぱり
 私にはとてもわからない
 ただやたらに青いばかりの絵であった。

(詩集『メクラとチンバ』天平書院・1931 年刊)

『東京物語』より「春本番」(奥田英朗著・集英社文庫・2004 年刊)

1978 年 4 月。18 歳の久雄は、エリック・クラプトンもトム・ウェイツも素通りする退屈な町を飛び出し、上京する。バブル景気に向かう時代の波にもまれ、戸惑いながらも少しずつ大人になっていく…。80 年代の東京を舞台に誰もが通り過ぎる「あの頃」を鮮やかに描き出す。

枕元の時計を見るとまだ午前七時半だった。

田村久雄は布団を頭から被り、再び目を閉じた。小便をしたかったが我慢することにした。父親は毎朝測ったように七時五十分に家を出る。だからあと二十分の辛抱だ。

カーテンを透かすようにして朝の太陽が侵入してくる。ベッドで丸くなっている、気配で外が晴天であることはわかった。

「久雄は？」姉の声が階下から聞こえた。一瞬体を固くして耳を澄ます。「まだ寝とる」という母の声も届いた。父がなにやら話している。起こしにくるのかと緊張したが、どうやらその様子はなかった。

てのひらが汗ばんでいたので布団を蹴り上げた。寝返りをうって天井を見る。そこにはイーグルスのポスターが張ってあった。『ホテル・カリフォルニア』を買ったときにレコード店がくれたものだ。これも荷物に入れておけばよかったかなと思ったが、どうせ折れてしまうか心の中であきら

めた。

部屋の本棚に目をやる。おばあちゃんが昔買ってくれた児童文学全集と数冊の本を除いて、きれいに空になっていた。本棚の下二段を占領していた訳百枚の LP レコードは、今ごろ東京の下宿に届いていることだろう。これを持っていくと告げたとき、母は難色を示した。「あんた、勉強しに行くんやよ、わかっとる？」というのが母の言い分だが、譲るわけにはいかなかった。レコードは久雄の宝物だ。中学一年のときに洋楽に目覚め、それから六年間で百枚をためた。久雄は三度の飯よりロックが好きだ。

腕を頭のうしろに組んだ。意味もなくため息をつく。ふと、この部屋とも当分お別れだなと思ったが、さしたる感慨は湧かなかった。それより東京で暮らせる期待のほうが大きかった。四月四日。今日こそが久雄の記念すべき上京の日だ。

この二ヶ月で見事なほどすべての大学に落ちた。正確に言えば、ひとつだけ救いの手を差し伸べた地元の大学があったのだが、百人受けて百二十人受かるようなところなので、五秒ほど葛藤したのち辞退した。劣等生でもプライドだけは高かった。

それに、久雄が行きたいのは東京の大学だった。学部など問題ではなく、東京なら坊さんの大学でもよかった。とにかくこの退屈な町を出たかった。エリック・クラプトンもトム・ウェイツも素通りしてしまうこの町を。東京には武道館がある。中野サンプラザだって（どういうところか知らないけど）ある。

そして父から離れたかった。

小さな商事会社を経営する父は、独善的で人を見下すのが好きな男だった。人に使われるような人間にはなるなが口癖で、近所のおじさんたちを名指ししては、「安月給でこき使われて哀れなもんや」と陰で言っていた。父は、息子が自分の会社を継いでくれるものと思い込んでいるようだった。

だから久雄の浪人が決定して、東京の予備校に行きたいと言いだしたときは、一悶着あった。

「行く」「あかん」「行く」「あかん」こういった埒のあかないやりとりののち、父は「東京なら仕送りはせん」という台詞を持ちだしたのだ。当人は切り札のつもりだったらしい。

しかし久雄にとっては痛くも痒くもなかった。実のところ、大学へ行きたいという気持ちは薄かった。さっさと自立したかったのだ。「ええよ。バイトで食ってくで」

あっさりそう言うと、父は黙った。そして一週間の冷却期間をおいて、久雄は完全勝利をおさめたのだった。もっとも父と直接衝突したわけではなく、すべての会話は母を通じて行われた。高校三年間で、父と口をきいた時間は全部足しても十五分ほどしかない。

トントンという階段を上がる足音が聞こえた。あわてて布団を被る。子供部屋の戸が開いて、母がすぐ横までやってきた。「久雄君、おとうさん、会社に行くから」耳元でささやいた。

「……うん？」わざと寝ぼけた声を出す。

「おとうさんに『いってきます』って、ちゃんと言って。しばらく会えんのやで」「……おう」

返事しながら起きなかった。久雄は、できれば父と顔を合わせないまま東京へ行きたかった。面と向かい合うだけで気詰まりだ。そのために、今朝は目が覚めても寝たふりをしていたのだ。

「ねえ、久雄君」

「うん……わかった」

仕方がないかと観念した。いくらなんでも避けすぎか。体を起こし、首の骨を鳴らした。義務だけでも果たしておこう。

その時階段の下から父の声がした。「おい、久雄」ぶっきらぼうな声だった。「おとうさん、もう行くでな。……元気でやれよ」充分すぎるほど二階まで届いた。

(pp.66-69)

